

令和 6 年度
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

I 令和6年度 FD 委員会活動について

令和6年度 FD 活動の基本方針

本学の FD 事業の目的遂行に向けて、PDCA の手法を視野に入れながら FD 活動のチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行う。昨年度に引き続き、本学 FD 推進のための企画や、授業アンケート事業を中心に実施するほか、新たに学科や専攻等小規模単位での FD 研修会申請のしくみを設け、ニーズに応じた FD 活動の促進に努める。

基本方針に従って実施した事業は以下のとおり。

- ・FD 講演会
- ・授業評価アンケート
- ・FD 新任研修会
- ・FD 資料展示
- ・授業参観
- ・「FD 活動報告書」の編集発行・公開
- ・委員会開催
- ・FD 研修会（新規）

以下にその詳細を報告する。

1. FD 講演会

令和6年度に開催した FD 講演会（前期・後期）の企画・実施方針は、令和5年度に行われた認証評価の結果を材料とした教育・研究活動の課題整理と、その対応策としての FD 活動の検討とし、以下のとおり 2 回の FD 講演会を開催した。

・第1回短期大学部 FD 講演会

日時：令6年7月18日（木）16:00～17:00

実施形態：対面

講師：静岡県立大学短期大学部こども学科 特任教授 永倉みゆき氏

演題：「認証評価を私たちはどのように「教育・将来構想」に活かすことができるのか」

参加者：28名

認証評価制度のねらいや骨格（大学基準協会における大学評価、短期大学認証評価の歩み等含む）をふまえ、大学の質保証としての本制度の意義・利活用等について説明いただくとともに、短期大学部における令和5年度認証評価の提出資料作成の過程と認証結果をもとに、現在の対応課題、必要となる教育組織としての FD 活動について講演し

ていただいた。参加教員によるアンケート結果は、「大いに参考になった」「参考になつた」をあわせて88%という高い満足度であり、自由記述からは、認証評価結果への対応が短大運営だけでなく、新学部設置につながるものであるという認識や、カリキュラムマップの検討を含めた継続的な議論の必要性等についての意見があり、教員個々のみならず組織活動として必要な対応策を検討できたことが伺える結果であった。

・第2回短期大学部FD講演会

日時：令和7年2月27日（木）16：20～17：20

実施形態：対面

講師：静岡県立大学短期大学部社会福祉学科 教授 松平千佳氏

演題：「短期大学の教員が取り組む研究の意義 - HPS 養成講座をとり巻く教育・研究・社会貢献の連動性 - 」

参加者：26名

講師である松平教授が取り組む研究事例から、「研究の旅の道程を確認する」というキーワードをもとに、研究活動におけるテーマ設定や、学際的な議論に必要な研究者との出会いと視野の拡がり、実践、教育、研究の循環的活動の組織化と、これによる社会貢献の基盤等について講演いただいた。参加教員によるアンケート結果は、「大いに参考になった」「参考になつた」をあわせて95%という高い満足度であり、自由記述からは、講師自身の研究の旅を同定を示してくださいり、深い学びと共に、自身の研究が社会にどのように貢献していくことができるのかを考えるきっかけとなった等、参加教員個々の研究活動と照らした内省的なFD活動となつたことが伺える結果であった。

2. FD研修会

日時：令和7年3月25日（火）10：30～11：30

実施形態：対面

講師：インフィック株式会社 取締役 九藤博弥 氏

演題：「IoT&AI事業×介護事業 IT介護士セミナーの取り組み」

参加者：9名

近年テクノロジー導入が進められている介護事業の政策的・実践的取り組みを紹介いただくとともに、講師である九藤氏が開発した介護士セミナーのプログラムや活動内容をもとに、求められる介護福祉士養成教育についての検討を行った。

参加教員からは、介護現場における具体的なテクノロジー導入、活用に関するイメージを得られたほか、介護福祉士養成カリキュラムとしての位置づけや、教育に必要な資機材等についての検討など、介護福祉専攻企画としての目的に叶う議論が行われた。

3. 授業評価アンケート

令和3年度に内容の見直しを行った質問項目を用いて実施した。実施方法は、授業最終日とし、実施率は非常勤担当科目をあわせて95%であった。

4. FD新任研修会

本学の教育力の維持向上を図るため、初任者2名（10月：2名）を対象に、教育理念や教育指導等、本学の教員として身に着けておくべき基本的な知識を習得するための研修を行った。

5. FD資料展示

短大FD委員会では、例年小鹿図書館と連携し、FD資料展示コーナーを設置している。令和6年度も近年刊行されたFD関連書籍の中から、小鹿図書館スタッフに選定していただき、特設コーナーを設ける等の資料展示を行った。

6. 「FD活動報告書」の編集発行・公開

昨年度と同様、授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成することを決定した。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートへのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

7. 委員会開催回数

4回

II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法は、遠隔授業実施を踏まえて、遠隔授業に関する質問項目を残しつつ、対面方式で実施した。授業評価アンケートの内容は、令和3年度見直しを行った内容で実施した。

実施方法は次の通りである。

- ① アンケートの実施時期は、早期終了科目は授業第8週より、15回実施科目は授業第14週より回答開始とし、回答期限を集中講義/補講/試験期間の最終日とした。
- ② 授業担当教員が授業ごと、授業終了15分前に学生にアンケート用紙を配布、説明をした。学生がアンケート用紙を回収し、封筒に入れて学生室へ提出する。
- ③ 学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄の転載を外部業者に委託する。
- ④ 業者から納品された教員個々のアンケート集計と自由記述を転載したものを作成し、F D委員会から各教員へ配布し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
- ⑤ 上記①～④は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑥ 担当科目のうち、回答者が5名以下の場合は、集計を行わない。
- ⑦ システム上、授業科目ごとの評価となるため、担当教員2名以上で担当している科目は、履修科目一覧表の1番目に名前が記載されている教員に結果を渡す。

1. 2. 授業評価アンケート用紙

R5年度同様に、3つの大項目を設定し、「あなた自身の取り組みについて」(7項目)、「授業について」(13項目)、「遠隔授業の方法について」(3項目)、計23の質問項目を設定した。各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの5段階によって行なわれる。自由記述欄は、「この授業でよかったですと思うこと」、「この授業で改善が必要だと思うこと」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生のコメントを具体的に述べられる内容となっている。

授業評価アンケートで使用した質問項目

あなたについて	1	自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ。
	2	自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。
	3	自分は、この授業を意欲的な態度で受講した。
	4	自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。
	5	自分は、予習復習（提出課題を除く）をして理解を深める努力をした。
	6	この授業の内容は良く理解できた。
	7	自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。
授業について	8	シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた。
	9	授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった。
	10	授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた。
	11	毎回の授業の量と範囲は適切であった。
	12	教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。
	13	教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた。（説明の仕方、授業形態、配付資料、板書、情報機器の活用など）
	14	教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた。
	15	教員から与えられた課題（宿題、レポート）は、質・量ともに適切であった。
	16	教員に授業に対する熱意が感じられた。
	17	教員は、学生に対して誠実に対応していた。（質問への対応、レポートへのコメントなど）
	18	成績評価の方法は適切であった。
	19	この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。
	20	安全についての指導や配慮が十分なされていた。（実習科目のみ回答）
No.21～23は遠隔授業が行われた科目について回答してください。		
遠隔授業について	21	遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった。
	22	遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた。
	23	遠隔授業での課題は、学生が主体的に学べるように配慮されていた。
その他の意見		
<ul style="list-style-type: none"> ・この授業で良かったと思うこと 		
<ul style="list-style-type: none"> ・この授業で改善が必要だと思うこと 		

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し全教員に配信する。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和6年度FD委員会報告』に記載し本学web上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤子ども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻:一般教育等 職名:教授 氏名:林恵嗣
対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

【体育実技】

すべてのクラスで良い評価が得られたと考えています。体育実技ですので、身体を動かすという点は非常に大事になってきます。今後も学生の意見を尊重しながら、運動量も確保できるようにしていきたいと思います。

自由記述で、クラス編成についての改善要望がありました。時間割編成にも関わってきますので、すぐに改善できるか分かりませんが、今後検討したいと思います。

学生へ期待すること:授業の中で説明できること・教えられることには限界があるので、自分から調べたり、教員や上手な人・詳しい人に聞いたりするようになってほしいです。また、授業でも話をしましたが、身体を動かすことが心身の健康につながるため、授業外でも積極的に身体を動かすようにしてほしいです。

【健康科学論】

概ね良い評価が得られたと考えています。令和5年度から、毎授業後に Universal Passport で課題を実施してもらい、課題の結果も成績評価項目としています。これは、授業内容の理解を深められるように設定しています。自由記述で、課題かテスト(試験)かどちらかにしてほしい、という意見がありましたが、課題とテスト(試験)の両方を実施することで授業内容の理解を深めることにつながっているはずです。授業時間内で振り返りができるようにしていますので、そういう時間を活用しましょう。

学生へ期待すること:授業内容は難しいところも多々あるとは思いますが、授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしいです。プリントを読み返すだけでも随分と違ってくると思います。また、分からぬ点については、遠慮なく質問をしてほしいです。授業時間外でも対応します。

学科：一般教育等 職名：准教授 氏名：有元志保
対象科目：英語（演習）

本科目では、英語運用能力の向上を目指して基礎的な演習を行う。英語を学びながら、異文化に対する理解を深めることも目的としており、本年度は、世界を取り巻く現状や課題についてのメディア動画を中心とする教材を使用した。

シラバスでは、授業の到達目標として以下の項目を設定した。

1. 授業で習得した語彙や文法知識を用いて英文を読み、内容を理解できる
2. 短い動画を繰り返し視聴し、生の英語の聞き取りに慣れる
3. 学習内容や、それに対する自分の意見を簡単な英語で表現できる
4. 今日の世界の動向や課題について理解と関心を深める

1については、単語の品詞や例文を辞書で確認したり、パワーポイントの資料を補助的に使用しながら英文の解釈を行ったりするなどして、わかりやすい説明に努めた。

2については、映像と音声を用いて個々の単語の発音や、単語と単語の音のつながりなどを確認し、リスニングの練習を繰り返し行った。

3については、ペアワークやグループワークを交え、英語で学習内容を要約したり、自分の意見を表現して他者の考えも聞いたりする機会を積極的に設けた。

4については、テキストの内容に加え、インターネット上の英語で発信された情報を適宜参考しながら、学生の視野を広げ、発展的な理解につながるよう心がけた。毎回の授業で小テスト、前期と後期の終わりにはテストを実施して理解度を確認し、コメントシートでは疑問点や意見を募って、それぞれフィードバックを行った。

各学科・専攻の授業評価アンケートでは、各項目について総じて高い評価が得られ、自由記述では、進度の適切さやパワーポイントの資料の見やすさなどを評価するコメントが見られた。今後も学生の主体的、積極的な学習を促しつつ、効果的な授業運営を目指して工夫を重ねていきたい。

学科・専攻:一般教育等 職名:准教授 氏名:竹下典子

対象科目:食生活と環境(講義)、栄養学歯科栄養学(講義)、食生活指導演習Ⅰ(演習)、生活支援技術Ⅱ(演習)、子どもの食と栄養(演習)、生活支援技術Ⅲ(演習)

「食生活と環境」では、授業後に Google フォームを活用した確認テストを実施した。全学生がスマートフォン等を持参しており、紙ベースの予備を使用する場面はなかった。これにより、教員側の採点・集計も効率的に行うことができ、ICT を活用した授業運営がスムーズに行えた。

「食生活指導演習Ⅰ」において、昨年度、調理実習が時間内に終わらないケースがあり、アンケートでも指摘を受けていたため、今年度は改善策として調理のデモンストレーション動画を事前に録画し、前週の授業で視聴する形式に変更した。この取り組みにより、実習の進行に時間的余裕が生まれ、ほぼ全回で時間内に実習を終了することができた。一方で、動画視聴中に居眠りする学生が多く、「動画が長かった」とのコメントも見られたため、やり方を再度検討する必要がある。

「子どもの食と栄養」では、今年度は、食育プレゼンテーションの実施場所を学内から幼稚園へ変更した。園児の前で発表することで、学生に適度な緊張感が生まれ、実際の子どもたちの反応から学びを深めることができた。学生からは手応えを感じたという声が多く聞かれた。

調理実習を行う科目(「食生活指導演習Ⅰ」「子どもの食と栄養」「生活支援技術Ⅲ」)では昨年同様「調理実習が楽しかった」という前向きなコメントが多く見られた。今後も学生が楽しみながら学べるよう、工夫したい。

専門科目の講義では、昨年度途中より、講義資料を穴埋め形式のスライドで配布する方法に変更したところ、学生の集中力が向上したと感じられた。「図やイラストが多くて理解しやすかった」「わかりやすくまとめられていた」との好意的なコメントも多く、引き続き視覚的にも分かりやすい教材作成に努めていきたい。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:上田一紀

対象科目:情報処理演習(演習)、情報の活用(演習)、情報と生活(講義)、現代社会学(講義)

[情報処理演習](演習)

本科目の到達目標は、PC の基本操作、PC を用いた文書作成、データ処理（表計算、グラフ作成）、インターネットの利用、プレゼンテーション資料の作成を行えるようになること、である。

[情報の活用](演習)

本科目の到達目標は、クラウドコンピューティングシステムを PC とスマートフォン（複数端末）で活用できるようになること、情報の活用（情報の収集、編集、発信）に関する技法を習得し、コミュニケーションツールとして使用できるようになること、である。

- ⇒ 上記 2 科目について、全クラスで、学科・専攻平均点を上回る評価を得た。
- ⇒ 自由記述にはプラスの評価が多く記されており、今後も継続して学生の主体性や当事者性を引き出しながら、教育を行っていきたい。
- ⇒ 一方で、課題の量・難易度、および課題に対する質問対応について、改善を求める声が 2 件あったので、検討したい。

[情報と生活](講義)(※履修者が 5 名以下のためアンケート未実施)

本科目は、情報機器（PC やスマートフォン）やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法（情報法、メディア法）の基本を理解すること、を目的としている。

[現代社会学](講義)

本科目は、社会学的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会学的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになること、を目的としている。

- ⇒ I あなた自身について [当科目平均点 4.29] ⇔ [学科・専攻平均点 4.43]、II 授業について [当科目平均点 4.67] ⇔ [学科・専攻平均点 4.67] であった。とりわけ、「この授業の内容はよく理解できた」が 4.17、「授業の難易度の適切さ」が 4.52 と低かった。
- ⇒ 自由記述には、グループワークやプレゼンテーションの実施に関してプラスの評価が寄せられた。引き続き実施していきたい。
- ⇒ 一方で、内容が難しいという意見が 1 件、資料の文字が多くわかりにくいという意見が 1 件、寄せられた。具体的にどの回の内容かは自由記述から明らかではないが、おそらく社会学の学説史や代表的な理論を扱う回であると推察される。初学者でも理解し易いように説明や資料を工夫していきたい。（しかし、難しいことを理解しようとする姿勢も大切です。）

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:高田佳輔

対象科目:データサイエンス入門(講義)、社会調査の基礎(講義)

● データサイエンス入門

授業に関して学生が評価を行う項目群については、学部・専攻平均点が 4.60 であるところ、本科目の平均点は 4.81 であり、ポイントが大きく上回る結果となった。本年度の取り組みについて、次年度以降についても継続して実施していきたい。

● 社会調査の基礎

授業に関して学生が評価を行う項目群については、学部・専攻平均点が 4.63 であるところ、本科目の平均点は 4.54 であり、ポイントがやや下回る結果となった。強いて改善点を挙げるのであれば、「授業の難易度」や「教員の授業に対する熱意」に関する評価が相対的にやや低かった。いずれも、これまでに大きな指摘を受けることはなかった点であるので、次年度以降の学生から同様の指摘を受けるようであれば改善をしていきたい。

授業での取り組み

私は、全ての担当科目に対して次の 3 点の工夫を継続して行っている。

第 1 に、学生が意欲的に授業に取り組めるように、毎回、アクティブラーニングを前提とした授業を展開し、毎回の課題においても次回の授業の冒頭で必ずフィードバックを行うことで、学生が能動的かつ意欲的に授業に取り組める環境づくりを行っている。関連して、クオリティの高い課題については、必ず授業中に紹介するようにしていることで、他の学生が「どのようにすれば良いレポートを書けるか」について学びが得られるような授業づくりを行っている。

第 2 に、“仮に”学生が授業中に教員の話を何一つ聞かなくとも、それを見るだけで当該回の授業内容を学習することができるような授業資料を作成・配布することで、誰一人取り逃がさない授業を展開した。関連して、やむをえず授業を欠席・公欠する学生に対して、学習の遅れを取り戻せるようにこのような授業資料づくりを行っている。

第 3 に、学生のリアクションペーパーに書かれた要望に対して、極力その要望を授業に取り入れることで学生のモチベーションを向上・維持を狙っている。

まとめ:自由記述に対する検討

自由記述に関しては、両科目について良い評価を得られた。例えば、データサイエンス入門では、「資料が分かりやすく、もし分からなくなってしまっても丁寧に教えてくださったので、分かりやすかった」、「教員が学生に寄り添っている授業であること」、「初めて習うことが多かったり、難しかったりした時があったけれど、少しずつできることができて嬉しかったです」など計 17 点の好評が得られ、社会調査の基礎でも、「こういう分野は苦手だったけれど前より興味を持てるようになりました。」、「授業課題が毎回しっかりと評価されるので、意欲的に取り組むことができた」、「課題よ

かった人みたいなので言ってくれるのうれしかった！」など計 11 点の好評が得られた。

以上から、上記の教員の工夫が効果的であったことが、学生の自由記述から読み取れよう。今後も学生の要望を取り入れながら、授業内容は難しいながらも受講している学生が学びを楽しいと思えるような授業を開いていきたい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:野口有紀

対象科目:歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、地域歯科保健実習(実習)

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目指とした。基礎と専門科目、講義と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果およびエビデンスレベルの高い原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を作成した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう授業内でマークシート形式のプレテストとポストテストを行った。プレテストおよびポストテストは国家試験に準じた形式で行った。小テストの解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用いた。
- ・ 事前学習として必要な部分を自ら判断し、事前学習するように促し、修得した基礎科目の知識の見直しを課した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、グループワーク、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、机間指導を行い質問しやすい環境を設定するとともに、オフィスアワーを設定して丁寧な対応を心掛けた。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験のみに偏重しない多元的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケート集計結果の「I あなた自身について」「II 授業について」のすべての項目において、学科平均点より高い傾向がみられた。「II 授業について」では 4.86～4.87 であり、特に「授業の難易度は適切であった」「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」「理解が深まるように授業方法を工夫していた」「主体的に学びに取り組めるようにしていた」「授業に対する熱意が感じられた」「学生に対して誠実に対応していた」「評価の方法は適切であった」では非常に高い平均点であった。工夫した授業運営により、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。また、個人の学びの進度に合わせ、対応できるようオフィスアワーやコメントシート等利用し、各学生への取り組みにも重点を置くよう努めたい。

III 学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにして欲しい。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:吉田直樹

対象科目:生化学（講義）、口腔生理学（演習）、口腔微生物学（講義）、微生物学（講義）、歯周治療学（講義）、歯科衛生統計学（講義）

I 授業の目標及び授業において工夫していること

歯科衛生学科の特徴として、学生は卒業すると、「短期大学士」の学位とともに、「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。担当科目において、国家試験に直結するものが多いいため、全ての学生が国家試験に合格できるようにするために、必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、ひとつの目標としている。授業においては、要点を示して簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまっては、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。

学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような授業を行いたいと考えている。

日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるし、否定されることすらあり得るのだということを、理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC (Over Head Camera) を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」し、学生が実際に手に取って見ることができるようにしている。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。

また、90 分授業においては、前半と後半に分け、授業の中頃に、質問を受け付ける時間帯を設け、講義室内を巡回することによって、学生が疑問点を解決しやすいようにしている。このことによっても、集中力の低下を防げるのではないかと考えている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、概ね良好であったと考えている。

今後の改善としては、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思うような授業を行いたい。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を充分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するということにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考えている。

III 学生に期待すること

多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。このことは、決して理想的なことではない。

上記のように、「授業において工夫していること」の中で、「学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。」と述べたが、これは、実は理想的ではないのである。理想的には、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいと考える。

学生が、自主的に学ぶという方向に持ていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けるなかで、自分自身で能動的にノートをとれるような能力を身に着けることを希望する。

近年、本学に限ったことではないと思われるが、様々な状況において、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされているのではないかと、危惧している。マニュアルが無いとうまくできない部類の人を生み出す、手助けをしてしまっているのではないかと感じることがある。

学生にとって「わかりやすい」授業は、良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないようではいけない。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまふことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。卒業後、社会人になってからは、そのような能力は必須であろう。

学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちが生まれることを希望している。そして、それを持ち続けることを希望している。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:金山圭一

対象科目:①病理学(講義)、②歯科材料学(講義)、③歯科保存学(講義)、④臨床歯科医学特論(演習、フィールドワーク)、⑤口腔病理学(講義)、⑥救急処置法(講義)、⑦歯科材料学(実習)

「アンケートを回答してくれる学生さんへ」

大人になると、フィードバックを受ける機会はまれになります。人として賢明かは、どれだけ他人からのフィードバックを受け入れられるかだと思っています。フィードバックを受けて、自分の行動をどれだけ変えられるか、自己修正できるかということです。

それゆえ私は、アンケートの率直な(時には厳しい)、建設的な意見というものを大いに歓迎します。皆さんの意見は、次の授業のレベルアップの“もと”になります。私の拙い講義が、少しは賢い教え方に変わって行くわけです。厳しい意見も『フィードバックを参考に良くなつて』というメッセージと受け止めます。

私はこの授業アンケートを

- ・自分は「もっとよくなりたい」という欲求を持ち続けているか?
- ・自己修正サイクルを止めた化石になつていないか? という自分への問いかけの手段と考えています。

「令和6年度のアンケート結果を受けて」

自由記載に多くのコメントを書いて下さってありがとうございました。

複数の方から指摘があったのが“授業資料が多い”でした。

対応 ① 不要な資料はありませんが、内容をさらに吟味するようにします。

対応 ② 複数のスライドを一枚にまとめたものをユニバにアップロードします。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:准教授 氏名:長谷由紀子

対象科目:歯科衛生過程(講義)、口腔保健管理学実習(実習)、臨地実習基礎(実習)、臨地実習応用(実習)

【授業の工夫】

歯科衛生過程では、これまでの方法を継続した。事前に動画教材を視聴して知識を理解し、授業ではその補足講義、事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進める反転授業を実施した。

論理的な歯科衛生実践の考え方のトレーニングとなるよう、積極的な参加を促すように工夫して実施した。また、後期科目の口腔保健管理学実習では、前期の歯科衛生過程の学習を応用した歯科衛生実践の根拠を念頭におき、歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・実習を行った。

両科目では、定期的に学生が取り組んだ課題(ポートフォリオ)を提出してもらい、各学生の学習状況(成果)の把握と形成的評価のフィードバックを行い、個人に合わせた指導と学生の能力向上に努めた。

臨地実習基礎では、早期体験実習の目的を果たすため、学生が本実習の意義を理解し、ポジティブな気持ちで実習に向かえるよう、学習のレディネスを高めるため丁寧に説明や学習支援を行った。また、臨地実習終了後に学年全体で、個人での学習の振り返りを促すための報告会を実施し、学生の学習に対する満足感を高めるための仕組み作りを工夫した。

臨地実習応用の学校歯科保健実習では、1年次までおよび同時期に履修した科目の学習内容を活用し、対象者に合わせた歯科保健行動に関する「ねらい」を達成するための指導方法を学生たちが主体的に立案、実践するための学習支援を行うよう心掛けた。

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回、自由記述の感想から、学生は臨床実践に近い学びや学生が主体的に課題を乗り越えるための教員の支援を求めていることが分かった。また、それが学生の満足感や能力の獲得に繋がり、医療者教育にはそのような実践が重要であることが分かった。

学習支援に関しては、学生一人一人の学習状況の把握とそれに応じた形成的フィードバックは継続して実践していくことを感じた。今後は、提出された課題や学習ファイルからだけでなく、授業中にもなるべく個々の学生の学習状況を確認、把握し、その場で適切なフィードバックが可能な限りできるよう、教員側からのアプローチとともに学生からコメントや質問をしやすい環境づくりに努めたい。

授業内容の難易度については、学生の理解度に応じた分かりやすい説明と伝達能力、状況に応じた指導方法を引き続き研鑽していくべきである。

授業課題の質と量については、随時学生の様子や状況を把握し、学生の認知的負荷を鑑みて、学生の確実な能力獲得には妥協せず、それに相応しい課題の提示と学習支援が行えるよう尽力し

ていきたい。また、学内の講義・実習の学習内容が実際の臨床実践の活用に結び付くよう、これまでの臨床実践経験や医療者教育の知識やスキルを十分に活用し、学生の能力を向上させていくことが必須と考える。

臨床実習の防寒対策については、再度学科教員や臨床実習先とで検討していく必要がある。

【学生に期待すること】

受動的な学習では無く、学習の目的を理解し、主体的な学習の実践をお願いします。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:小林由佳梨
対象科目:歯科衛生倫理(講義)

【授業の工夫】

講義の導入部分において、普段の生活の中で出会う倫理的問題を取り上げながら、倫理について身近に感じることから内容を深めて進めていった。また、医療倫理についても、歯科衛生士が比較的よく出会う事例を取り上げ、グループワークでの事例検討を行い、学生が主体的に考えられるような配慮を行った。事例検討の前後では、事例に関わる倫理的知識について講義を実施し、必要な知識が確実に習得できるよう進めた。

【自己評価】

実際の講義では、「倫理的問題について考えることがとても難しい。」という意見が多数あったものの、アンケート集計結果では、約63%が授業の内容を理解できたかについて「そう思う」と回答しており、理解の状況としてはおおむね良い結果かと感じる。評価の方法が適切であるかについては、「どちらとも言えない」という回答も少数見受けられたが、これは、レポートの評価の基準の作成、学生への提示が不十分であった可能性が考えられる。ループリックの作成は行ったものの、実際活用してみると改善が必要な部分もあったため、今後再作成を行う予定である。また、学生に対しても、より具体的にレポートの記載方法を説明してから評価基準を提示するなどしていきたい。講義の展開の仕方については、疑問点を質問できなかった学生もいたことから、講義中の発言を促すなど、質問しやすい環境づくりの工夫を行っていく必要がある。レポートや小テスト内にも、質問を自由に記載してもらうなど、その場での発言が苦手な学生も疑問を解決しやすくなるよう対応していきたい。

【学生に期待すること】

医療倫理は、画一的な対応で1つの正解が導き出されることはなく、様々な立場での倫理観を考慮しつつ、その場の状況に応じた最善の行動を考えていくことが、よりよき医療人になるために不可欠である。講義の場だけではなく、多種多様な人々との協働を通じて倫理的行動を身に着けていくことを期待する。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:小林由佳梨
対象科目:歯科保健指導論(講義)

【授業の工夫】

実際の臨床症例や経験を踏まえ、学生が将来の歯科衛生士像をイメージできるよう、講義を展開していった。講義前の小テストを実施しや講義後のレポートによる講義の復習を行い、確実に知識が獲得できるよう工夫した。講義を展開していく上では、教科書をベースにしつつ、最近の研究結果も提示し、根拠を示しながら進めていくとともに、研究への興味が持てるようにも工夫した。

【自己評価】

講義後のコメントシートでは、毎回学生から豊富な意見と質問を受け取ることができ、学生の講義参加意欲は高かったと感じる。質問にはすべて回答したが、学生全員で共有が必要な質問に関しては、次回講義時に解説し、知識の向上ができたと考える。ミニテストの実施は、授業評価後アンケートにおいても、「記憶に残りやすい」との意見が見られたため、学生の知識習得を確実にするのに有効だったと考える。授業資料についても、症例写真や動画の提示などでわかりやすく工夫できた。しかし、資料の事前提示が遅かったため、学生の予習が不十分だった可能性がある。今後は早めに資料の事前提示を行えるよう、準備をしていきたい。講義のすすめかたについては、「学生理解度に配慮して授業を進めていた」、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」の項目で、わずかながら「どちらとも言えない」と回答している者があった。盛り込む内容が多くなった講義もあったため、全体の講義内容量のバランスも考えていく必要がある。一方的な講義にならないよう、学生に考える機会も増やす工夫も行っていきたい。

【学生に期待すること】

歯科保健指導論は、歯科衛生士が業務を行っていく上でのベースとなる科目であると考える。将来、歯科衛生士として必要な知識と技術をしっかりと押さえつつ、時には批判的な考え方を取り入れながら柔軟に対応できる力を養ってほしい。また、最新知見にも興味関心を持ち、根拠に基づいて考えられる力を身に着けてほしい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:松原ちあき

対象科目:高齢者歯科学(講義)、障害者歯科学(講義)、障害者歯科保健介護論(講義)、障害者歯科保健介護実習(講義・演習)、口腔介護予防・リハビリテーション法(講義・演習)

1. 授業の工夫

上記すべての講義において、「高齢者・障害者に対する口腔健康管理に必要な知識を得る」といった内容を目的として講義・演習を実施した。

講義内では、基礎的な疾患や法律に関する知識を実際の臨床での事例や症例を提示しながら、定着を図った。症例では、実際に実施しうる口腔機能管理を検討する課題を与え、アクティブラーニングを促した。

演習では、口腔健康管理の中で口腔衛生管理および口腔機能管理に分け、使用する器具や検査機器、口腔衛生管理用品について、実際に体験また相互に演習を行い、技術修練を行った。また介護・福祉やその他専門領域に優れた教員や専門家と連携し、講義・演習を実施することで、スペシャルニーズのある者に対する支援のあり方について幅広く知識を得る機会を作った。また高齢者・障害者の分野では専門的な研究が日々アップデートされているため、専門の講師を招致し、臨床のイメージや最先端の研究に関する情報を得るために機会を作った。

2. 授業についての自己評価と今後の課題・工夫

授業アンケート集計結果では、授業についての項目で「どちらとも言えない」と回答しているもの割合が昨年度と比較して増加した。対象となる学生の特性や理解度をはかりながら、授業内容を構築していく必要性があると考えられた。

日々アップデートする高齢者・障害者歯科分野の臨床現場の状況やエビデンスに基づく情報発信を行えるようにすることに加え、歯科衛生士国家試験の出題範囲や教科書の改訂が行われ、高齢者・障害者に関する出題範囲が広くなったことを踏まえ、国家試験や教科書の変更に応じて重要な分野に関する講義内での比重の変更などを実施していきたい。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

授業内で分かりにくい点や改善点等に関する意見をいただきたい。高齢者、障害者といった専門分野に特化した科目のため、臨地実習などの関連性が明確になりにくいところがあると考える。将来の歯科衛生士としての活動を念頭におきながら、より分かりやすく講義が展開できるように進めていきたいと考える。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:講師 氏名:山本智美

対象科目:歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲歯予防処置実習(実習)、歯科保健指導論(講義)、歯科保健指導実習(実習)、口腔保健管理学実習(実習)、臨地実習基礎(実習)、臨地実習応用(実習)

歯科予防処置、歯科保健指導は、歯科衛生士の主要な業務である。歯科予防処置論では、まず歯科疾患実態調査の結果を考察し、人々の口腔の現状と今後の問題点を、そして自身の口腔内を観察することにより、自身の口腔および歯科・口腔疾患の予防への関心が向上したと思われる。また、歯みがき等のセルフケアを専門的な視点から考えることにより、効果と問題点等を実感し、人々の健康に寄与する専門職になるためには対象者の立場になって考えることの必要性を実感できたのではないかと思われる。

感染予防法では、歯科医療従事者として必須の感染予防対策について講義、演習により理解を深めることができたと思われる。将来、医療従事者になる者としてワクチン接種の必要性についても考える機会となったと思われる。

歯科保健指導実習では、歯科保健指導論での学びをベースに、お互いが患者、術者になることにより、対象者の行動変容を促すことは困難なことを体験し、今後の課題を明確にすることことができたと思われる。また、齲歯予防処置実習では、実習内容の動画視聴を事前学習としたことにより、実習への心構えや注意点等を把握し実習に臨むことができたと思われる。相互実習では術式だけでなく、小児を想定した声掛けや伝えることの大切さを学び、安全で確実な操作を行うこと、注意事項等について体験することにより理解が深められたと思われる。実習後の振り返り、次回に生かすため考察レポートを毎回提示し、一人ひとりに丁寧にコメントを返した。

「臨地実習基礎」(患者実習)、「口腔保健管理学実習」(合同実習)では1年生は患者としての体験と先輩の様子を将来の自身に重ね合わせ、歯科衛生士を目指す者としての心構えを新たにする機会となった。2年生は前期に学修した歯科衛生過程を合同実習で実践し、情報収集、分析、計画立案、実施、評価、プレゼンテーションと一連のプロセスを通じ、困難ながらも実践から得た学びは大きいと感じた。1年次、歯科医院見学実習においては、学んだことが臨床現場でどのように役立つか、歯科衛生士の業務を間近で見学することにより、目指す歯科衛生士像が明確になったと思われた。

「臨地実習応用」(介護予防推進事業実習)では、在宅高齢者のオーラルフレイル等に関するアセスメントを行い、口腔機能向上のための計画立案、実施、評価までの一連のプロセスを実施することができた。

学生にとって高齢者とコミュニケーションの機会を共有できる大変有意義な実習であり、まず高齢者への接し方や口腔の現状を把握することができた。学んだ知識を現場で生かすことの難しさを経験し、専門職として思考過程を実践する力を身につけ、地域包括ケアシステムの場で学生の学修を推進することができたと思われる。

今後も学生が自ら疑問を持ち、解決する力を身につけられるような授業を展開するとともに、時代とともに変わりゆく教材や学習方法の提示の多様化等、今後検討していきたいと思う。また学生には大前提として、授業の予習、復習を習慣とする授業態度に期待したい。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:鈴木桂子
対象科目:歯科診療補助・支援実習 I (演習)

【授業の工夫】

1年後期の歯科診療補助論の講義を終え、本実習は2年次前期の学内実習(演習)となり、本格的に歯科衛生士としての実技を身に付けるべく実習が進んでいきます。

ガイドンスおよび綿球作成に始まり印象採得、口腔内写真、バイタル測定、X線撮影の補助等それぞれの実習には様々な内容が盛り込まれています。どれ1つとってもおろそかにできるものはありません。

しかしながら、学内での実習時間は限られているので、そこは積極的な自主練習を重ねてステップアップしてもらいたいと思っています。

【授業についての自己評価】

1年次の歯科診療補助論に比べると改善が必要だとコメントは特に上がってきませんでした。授業評価アンケートに関しては、アンケート実施時に必ず一言コメントを書いて欲しいと学生には伝えています。

ほぼ全員の学生がコメントを書いてくれますので、一つ一つのコメントを読むことが毎回楽しみになっています。

特に大きな問題はなかったと思いますが、その中で1点『自分は疑問点を必要に応じて教員に質問したと』の箇所の評価が少し低かったように思います。対策として、質問タイムの導入といったことも必要だと考えています。『安全についての指導や配慮が充分なされていた』、また『教員は学生が主体的に取り組めるよう工夫をしていた』との設問は5.00がそれについていました。

【今後の改善・工夫】

全体的に授業も丁寧でやる気が出たとか、楽しく学べた、わかりやすいという意見が多く寄せられました。次年度のエネルギーとしたいと考えています。

【学生に期待すること】

一つ一つの実習を大切に真面目に取り組んでいってもらいたいと思います。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:鈴木桂子
対象科目:歯科診療補助・支援実習Ⅱ(演習)

【授業の工夫】

2年生前期に歯科診療補助・支援実習Ⅰの実習(演習)を経て、後期に迎えるのがこの実習になります。

実習室の使い方にも慣れ、術者、補助者、患者の役割分担もスムーズに行えるようになってきます。支援実習Ⅱでは、保存修復時の診療補助、歯科麻酔時の診療補助、口腔外科治療時の診療補助といった歯科診療の様々な場面での補助について、知識および手技を習得していきます。ですので、幅広い科目での学習の知識も求められます。そういった講義の復習も織り込みながら授業を進めています。

【授業についての自己評価】

授業評価アンケートでのコメントは、実際に器具を触ってわかりやすかったとか、安全に配慮された実習であったとかといった意見が寄せられました。またこの実習を今後の3年次の臨地実習でも活かせるようになりたいといった抱負も書いてありました。

こちらの意見を大切にしながら、次年度も進めていきたいと思っています。

【今後の改善・工夫】

1年次の座学で勉強しているとはいえ、忘れている講義内容もあるはずです。そういった課目の復習や振り返りを随所に入れ、思い出してもらいながら、歯科診療補助・支援実習Ⅱの実習に臨んでもらう授業を今後も続けていきたいと考えています。

【学生に期待すること】

実習の一つ一つは今後皆さん歯科衛生士という口腔保健のプロになっていくための大変なステップですので、おろそかにせずしっかりと身に付けていってもらいたいと思います。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:鈴木桂子
対象科目:歯科診療補助論(講義)

【授業の工夫】

歯科診療補助論は、全8回の1年後期の授業となっています。
歯科衛生学科で、臨床基礎実習室を使用しての本格的な実習は2年次からになっていますので、
本講義はいわばその素地作りとの位置づけです。
これから自分たちが目指し、プロになっていくための歯科衛生の入り口であり、目標をきちんと定め
ことができるよう展開をしていきたいと思っています。
8回の講義に関しては、教本に沿った1冊の副教材を作成し、第一回目の講義の時に配布してい
ます。
書き込み式としているため、学生は講義を聞きながら記入あるいはメモを取れるような工夫をし、授
業の途中には、巷で流行っている脳トレといったクイズを1、2問入れ込んで、頭のリフレッシュをし
てもらうように講義を展開しています。

【授業についての自己評価】

副教材を1冊の冊子にしているために、そこが主流となり、教科書に戻ることを忘れるがちなのかもしれません。今年度のアンケートに教科書のどこのあたりのとか説明が欲しかったとのコメントが入っ
ていました。
他のコメントに関しては、全体的には講義が面白かったとか、私の現役時代のエピソードもためにな
った。これから歯科衛生士になることが楽しみになったといった意見が多く書かれていました。

【今後の改善・工夫】

全体的に評価は悪くなかったように思いますが、『課題や小テストを作って欲しかった。』
とのコメントがあり、次年度に向け改善したいと考えています。

【学生に期待すること】

学生には、できることなら、この冊子を2年次3年次終了までとつておいて、折に触れ見返してもら
いながら様々な場面で活用していただけると良いかなと考えます。

学科・専攻:歯科衛生学科 職名:助教 氏名:中村和美

対象科目:歯科衛生総合演習Ⅰ(講義)、歯科衛生総合演習Ⅱ(講義)

本科目は、歯科衛生士国家試験出題基準に則り、科目の整理・総まとめをして総合的理解の定着を図り、歯科衛生士国家試験合格への自己学習をサポートする科目です。国家試験勉強は本科目を履修しただけでは不十分であることは言うまでもありません。まずは夏休み中に、『徹底分析！年度別歯科衛生士国家試験問題集』を解き終えて、出題傾向や自分の実力、苦手分野を知ることからスタートし、本科目開講までに勉強習慣が定着していることが前提です。令和6年度は夏休み中に学習習慣を身につける対策を試みましたが、大多数の学生が実施せず、夏から始める国家試験勉強が習慣化しなかったことは非常に残念でした。近年、年明け1月になっても学習習慣が身につかず何から手をつけてよいかわからない学生、国家試験勉強を計画的に遂行できず準備が間に合わなかった学生、受かるから大丈夫と過信して勉強しない学生が全国的に増えているようです。残念ながら本学でもそのような傾向を痛感しています。勉強が間に合わなかった学生、過信して勉強を手抜きした学生が歯科衛生士国家試験不合格となる厳しい現実は、全国合格率の低下に繋がっています。国家試験勉強は1年次の科目から始まっています。定期試験前にまとめた内容や臨地実習記録の調べ学習はその場限りで完結するのではなく、3年次の国家試験勉強に繋がるよう常に意識してほしいものです。

本科目の時間割について、講義を担当する教員も同時期に1・2年生の講義を併行して担当しているため、集中講義のように1日に複数科目を組むことがなかなか困難であることはご理解いただきたいです。可能な限り1日で複数科目の受講が可能となるように今後も配慮していくますが、1日1科目の日があったとしても、時間外は図書館などで勉強時間に充てて過ごすことは可能です。時間を有効に活用しましょう。

国家試験問題は、『歯科衛生学シリーズ』から出題されます。本科目は科目担当教員が、過去の出題傾向を分析してポイントをピックアップし、『徹底分析！年度別歯科衛生士国家試験問題集』、『歯科衛生学シリーズ』、スライド、プリントなどを用いて補足説明を加え独自の教授法で講義を展開します。『歯科衛生学シリーズ』の重要箇所は必要に応じて早期に暗記し、知識の定着に努めましょう。

「歯科衛生総合演習Ⅰ」「歯科衛生総合演習Ⅱ」では、第11講終了後に理解度を確認する試験を実施します。試験までの期間が短いとの意見をいただき、1~2月の模擬試験の合間に組むように改善したいと思います。その際、午前中に試験、午後は自己採点と採点結果の振り返りから自己の課題を明確にして、各自が国家試験勉強を行う時間としていますので、主体的に臨んでください。質問が生じた場合は、科目担当教員に繋げますので、遠慮なく質問してください。自己学習時間を有意義な時間とするか、意味がないと捉えるかはみなさん次第です。

学科・専攻:社会福祉学科 社会福祉専攻 職名:教授 氏名:松井順子
対象科目:高齢者の生活の理解Ⅱ・高齢者の生活の理解Ⅰ・社会福祉論

【高齢者の生活の理解Ⅱ】

授業評価アンケートの集計結果、並びに、自由記述を拝見しました。

前期と比較すると、「授業時間が長い」という記述のご意見があり、アンケートの集計も「どちらともいえない」という回答の方が2名前後おられることが分かりました。

前期・後期に渡る「高齢者の生活の理解」という科目について、私自身も「量的・内容的」に適切であったか、振り返りが必要であると思います。その一方で、学びが進むと、それまでの学び意欲に応じて、内容が理解できない、あるいは、課題の提出を負担に思う方もおられたと思います。

ですが、専門職として求められる知識を届けるための授業であり、課題です。教える側の責任を問うと共に、「どちらともいえない」と回答された方もご自身の学びの姿勢を一度、振り返って頂くことを期待しています。

私自身、2名の方のアンケート回答を謙虚に受け止めたいと思います。そして、学生のみなさんの更なる成長を期待しています。

【高齢者の生活の理解Ⅰ】

授業評価アンケートの集計結果、並びに、自由記述を拝見しました。学生のみなさんが、高齢者と直接お話をすることを前向きにとらえて頂けたことについて、授業を担当した教員として大変嬉しく思います。

グループワークの時間について、十分ではなかったこと、お詫びいたします。もう少し時間を取った方が、学生間の意見が出て、よりよいものになったのはご指摘のとおりです。

2年生は実習時間も長くなり、これまでの多くの学びを一層活かせるはずです。私は定年退職しましたが、みなさんの成長を介護の先生方から伺う機会はたくさんあるので、楽しみにしています。

介護の根拠を常に意識する一方、人と人としての関わり交わりを大切にして、しっかり歩んでください。

【社会福祉論】

授業評価アンケートの集計結果、並びに、自由記述を拝見しました。

「毎回の授業の量と範囲は適切であったか」という質問に対する回答は2名の方が、「どちらともいえない」と、回答しておられるようです。

余談がはいり、そちらの話しが長くなったり、歯科衛生士のみなさんにも「歯科と福祉の関係性の強さ・深さ」を理解して頂きたい思いが先行したのではないかと思います。学生のみなさんの回答を謙虚に受け止めたいと思います。ですが、自由記述は「分かりやすかった」「関西弁がよかったです」など、前向きなコメントも頂戴しています。

「社会福祉論」の授業では福祉の片鱗に触れる機会であったとご理解頂き、繰り返しになります

が、医療と福祉は極めて近い存在で、どちらも憲法25条の下、私たちはそれぞれに活動している専門職であることを、卒業後も記憶の片隅に置いて頂ければ幸いです。

貴重なアンケート回答とコメントを頂き、ありがとうございました。

学科名：社会福祉学科 職名：教授 氏名：松平千佳
対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク演習Ⅰ,Ⅱ,
Ⅲ 障害児保育 子育て支援 ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習 学科
共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)Ⅱ(障害児編)」社会人対象ホスピタル・プレ
イ・スペシャリスト養成講座

1. 全体的な感想

ソーシャルワークを学ぶことは、自己覚知を要求されるため学生にとってはしばしば厳しい学びとなる。社会福祉の専門職として大切なのは、「ゆらぎの中にとどまる力」であるといえる。2年間で、答えが明確でない中、困難に直面している人と向き合い続けることは大きな勇気が求められる。社会福祉を学ぶ学生にとって必要なことは自己開示と自己表現である。知識の蓄積だけでは済まないソーシャルワークを学ぶ学生にとって必要なことは教員との信頼関係であり、学生一人ひとりの成長をサポートする「安心」を土台とした支援的な関わりが不可欠である。その姿勢が学生からの評価として表れていると考える。

2. 授業の工夫（育てたい力）

今年度は、特に「表現すること」や「相互に聴き合うこと」に焦点をあてた授業づくりを意識した。たとえば、他者と自己を安全に開示し合える小グループでの対話活動や、物語を起点とした感情共有の場を多く取り入れ、学生が言葉を使って自分を語る練習を積むことができるよう工夫した。また、社会福祉の理論を生活感覚と結びつけて理解できるよう、ニュースやSNS上の話題など、学生にとってリアルな題材を多用した。その結果、抽象的であった「対人援助」や「共感」の概念が、自分自身の体験と結びつき、実感をともなって理解されるようになった。演習科目の評価が高いことは大変励みになる。

3. ソーシャルワーク実習教育

対人援助の現場では、正解のない問い合わせに向き合いながら、他者の人生に伴走する力が求められる。今年度は、実習前の段階から「自分が何を怖れているのか」「なぜ迷うのか」といった感情のプロセスに丁寧に向き合うことができるよう、リフレクションを重視した演習を強化した。学生は次第に「わからないことをわからないまま言葉にする」「他者に助けを求める」ことの価値に気づいていった。これは、現場で柔軟に学び続ける力の基礎であり、専門職として成長していくための重要な一歩である。

4. 学科共通科目「ホスピタル・プレイ」について

保育士、社会福祉士、介護福祉士、歯科衛生士を目指す学生にとって、ホスピタル・プレイを学ぶことは、ハイリスク児の心に寄り添う専門的支援の理解を深めるうえで重要であ

る。身体的ケアのみならず、心理的安心を保障する視点は、どの職種にも共通して求められるものである。遊びを通じて感情を表現し、不安を軽減する力を理解することは、援助者としての感受性やコミュニケーション力の育成につながる。ホスピタル・プレイの学びは、相手の立場に立ったケアのあり方を考えるきっかけとなり、実践の幅を広げる大きな意義を持つ。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:江原勝幸
対象科目:社会福祉原論 II(講義)

I 授業の目標・工夫など

この科目は、専攻学生の卒業必修科目であり、前期「社会福祉 I」で学んだ社会福祉の原理・原則、歴史、制度など基礎構造を理解した上で、身近な現代社会の問題から広義の福祉の視点で問題の本質を理解し、必要な支援を考える発展的な内容としている。授業目的は 1)社会問題と社会構造の関係の視点から、現代社会と福祉支援について理解する、2)福祉政策の概念や理念について理解する、3)福祉対象者のニーズに応じた福祉政策の構成要素・過程について理解する、4)福祉政策の動向と実施課題について理解する、5)福祉サービスの供給と利用の過程について理解するとし、その到達目標は、「自分自身の生活から社会福祉について考え、自分の言葉で社会福祉とは何かを述べることが出来る」及び「新聞記事・報道番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、広義の福祉の視点から現代の社会問題と福祉政策の現状と課題を考察することができる」としている。

令和 6 年度は全 15 コマ対面授業で実施した(障害当事者及び支援者のゲストスピーカーを含む)。授業は常に現代の社会問題を取り上げるため、授業の目的・目標は押さえつつ、シラバスに示した授業計画通りでないアップデートなトピック(新聞記事・映像資料)を取り上げる方式をとっている。このことは授業開始時に学生に説明し理解を促しており、授業評価アンケートの自由記述「毎回考えさせる DVD だった」「映像を色々見れてよかったです」「ていねいに教えてくださった」など学生の問題意識を高めるのに役立っていると思われる。提出課題は「福祉のコトバ:人編」と「福祉のコトバ:法制度編」を出し、学生自らが調べたものを共有化できるよう簡易冊子に、各自授業で発表した。また、これまでの授業評価において社会問題に関するビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、昨年度は「不登校、非行児居場所、衆議院選挙・若者投票率、過労自殺、ながらスマホ、ゲーム依存、発達障がい、災害支援」を取り上げ、その背景・要因、現状、支援、課題など社会福祉の視点で捉え、考えをまとめさせ、個々にコメントを付けて返答した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生評価では、「I あなた自身」で専攻平均点を 0.15p 上回ったが、全体的に一昨年度より評価は低く、#2(出席)4.50、#7(興味・関心)4.44 が高い(R5 は #2 及び #7 は 4.75)。#4(質問)は R5(4.15)と同様に R6 も 4.06 とカテゴリー内で最も低い評価であった。「II 授業」も学科・専攻平均点 0.02p とわずかに高く、#12(理解度配慮)4.44 が低いものの他項目はすべて 4.50 以上であった。評価の高いの質問項目は #9(難易度)と #19(新たな生日)の 4.72 であった。自由記述では「この授業で改善が必要だと思うこと」の回答はなかった。評価の低かった質問には、ワークシートに感想・意見以外にも質問を書くように促したが、効果がみられなかつたため授業中に学生が質問できるような授業展開及び授業・ビデオの感想・意見欄と質問欄を分けたワークシートを導入して今年度は取り組みたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:中澤秀一
対象科目:社会保障論 I (講義)、社会保障論 II (講義)、社会保障論 (講義)、公的扶助論 (講義)、公的扶助 (講義)

授業形態は対面形式を基本とした。ただし、実習期間中の休講分の補講についてはオンデマンド形式（動画配信）で授業を行った。オンデマンド形式でも、単に動画を視聴して終わらないように、課題についてはGoogle フォームを使って提出させる、課題テストを実施すること等で学習効果を高めることを心がけた。また、前回の授業内容に関する復習テストを実施して学習内容の定着にも心がけた。

授業評価アンケートの結果では、「授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」については、社会保障論 I (社会福祉専攻 1年) で **4.70** (4.62) で、前年度よりも平均点が上昇した（括弧内は昨年度の平均点）。また、教え方については、「学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論 I (社会福祉専攻 1年) で **4.85** (4.75) と、こちらも前年度と比較して平均点が上がっている。他の科目でもおおむね高い評価が得られている。引き続き、工夫を重ねていきたい。

アンケートの自由記述欄によると、「この授業として良かったと思うこと」として、「復習テストがあり、内容を複数できる良いキッカケであった」「内容がわかりやすかった」などのコメントがみられた（社会福祉専攻 1年「社会保障論 I」および社会福祉専攻 2年「公的扶助論」自由記述欄より）。また、授業資料として用いた動画については、「映像を使用しての授業であったため、理解しやすかった」「映像資料で理解を深めることができた」などのコメントがみられた（社会福祉専攻 1年「社会保障論 I」および介護福祉専攻 2年「社会保障論」自由記述欄より）。評価が高かった授業構成については、今後も継続されていきたい。

「授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」については、社会保障論 I (社会福祉専攻 1年) で **4.70** (4.57) で、前年よりも平均点が上昇した（括弧内は昨年度の平均点）。引き続きシラバスに沿って展開できるように心がけていきたい。また、教え方については、「学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論 I (社会福祉専攻 1年) で **4.80** (4.75) と、こちらも前年度と比較して平均点が上がっている。いっぽう、学生自身の取り組み方に関する設問、「自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した」は、社会保障論 I (社会福祉専攻 1年) では **3.25** と相対的に低い点にとどまった。学生が能動的に授業に臨めるような創意工夫をしていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:教授 氏名:鈴木俊文

対象科目:福祉経営とリーダーシップ(講義)、介護福祉論Ⅰ(講義)、発展介護技術(演習)、介護過程Ⅱ(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、介護福祉論(講義)、児童・家族福祉支援論(講義)、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究、介護概論・介護技術(講義・演習)

I 授業の目標・工夫した点

当該年度における担当科目の目標、工夫した点は次のとおりである。

介護福祉専攻担当科目では、1年前期の「介護福祉論Ⅰ」において、前年度中間テストの全体成績が低かった(前年度比)結果を受け、当該年度は中間テストのほか、配布資料を活用した回収型の授業内課題を増やし、これらの添削指導に加えて、理解度の低い内容を復習的に授業内で強化する対策を行った。また、例年満足度の高いディスカッション型のアクティブラーニングを継続した。2年後期の「福祉経営とリーダーシップ」では、静岡県社会福祉協議会社会福祉人材センターと連携した授業により「地域・国際」を新たなキーワードに加え、関連するケースメソッド教材の開発や実務家をゲスト講師に招いた実践型の授業に力を入れて取り組んだ。

また、社会福祉専攻の担当科目では、「介護福祉論」が社会福祉士養成課程の指定科目から外れたことを受け、当該年度も受講者数が減少傾向となつた、一方で、社会福祉士資格のみを目指す学生が受講する傾向も強くなつたことから、近接する社会福祉士指定科目との関連学習(老人福祉論、福祉サービスの組織と経営等)を強化した。このほか、「保育実践演習・卒業研究(社会福祉専攻)」、「介護概論・介護技術(歯科衛生学科)」等の授業では、当該年度も介護の対象やサービスマネジメントを含む支援技術に関心の高い受講者が数多く履修したため、介護技術やケマネジメントの演習のほか、体験型のフィールドワークを積極的に取り入れた。

II 自己評価と今後の課題

単独担当科目については、各評価項目の全体的な評価として、当該年度も学科平均より高い評価を得た。自由記述では、講義系科目において学習の難易度が高く感じられる記述がみられるものの、ディスカッション型の授業により学習の主体性や理解が高まつたことを表す記述が数多くみられた。これらは、授業内課題に厚みをもたせことによる影響が考えられるものの、個別添削や授業内での即時フィードバックを重ねた成果であると考えている。

また、福祉経営とリーダーシップについては、当該年度、厚生労働省が行う調査研究事業において、特色ある授業として視察対象となり、当該科目の学習成果を学生自らがプレゼンにより発表する機会を得た。この成果は事例集に掲載され、日本介護福祉士養成施設協会を通じて全会員校に配布された。また、例年複数教員による分担科目(演習)において、教員による関わりの差を指摘する記述がみられていたが、今年度についてはこれらの記述はみられなかつた。引き続き、担当教員間での連携を強化することを継続するとともに、個別指導、ゼミ形式による演習科目の特色を強化していくことに努めたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木 剛

認知症の理解Ⅱ（講義）、介護過程Ⅰ（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）、発展介護過程（講義）

I. 昨年度(2023年度)の授業評価を踏まえた取り組み

1) 認知症の理解Ⅱ

昨年度（2023年度）の授業評価では、「II 授業について」の平均点「4.64」であり、前年度より0.2ポイント上昇した。また、学生のコメントとして、「とても丁寧に細かく認知症についての特徴を教えて頂き、学べたことがよかったです」「毎時間の資料が分かりやすかったです。大事な語句などを何度も教えてくれるので助かりました」「簡潔かつ分かりやすかったです」など、19件がポジティブな内容であった。一方で、「謎の間があるところ」を改善点として指摘するコメント（1件）があった。そこで、更に満足度を高められるように、説明の途中で間が生じないように意識して授業を展開した。

2) 介護過程Ⅰ

昨年度（2023年度）の授業評価では、「II 授業について」の平均点「4.54」であり、前年度より1.8ポイント低下した。また、学生のコメントとして、「認知症の方のアセスメントなどを学べたことが良かったです」「プリントに情報が詰まっていて、一覧性のあるもので学びやすかったです」「大事な語句を繰り返し説明してもらい、覚えやすかったです」など、18件全てがポジティブな内容であった。そこで、引き続き満足度を維持できるように、授業の仕方や資料作成に注力した。

3) 介護福祉論Ⅱ

昨年度（2023年度）の授業評価では、「II 授業について」の平均点「4.80」であり、前年度よりも3.5ポイント上昇した（今回、遠隔授業は実施しなかったため、その評価は無し）。学生のコメントとして、「プリントが見やすい」「映像資料やレジュメが分かりやすいです」「分かりやすい授業資料でした」「虐待について学ぶことが出来て学びになった」「聴き取りやすい声でした。ありがとうございました」など、6件全てがポジティブな内容であった。そこで、引き続き高い満足度を維持できるように、授業の仕方や資料作成に注力した。

4) 発展介護過程

昨年度（2023年度）の授業評価では、「II 授業について」の平均点は「4.35」であり、前年度より4.1ポイント低下した。学生のコメントとして、「実践、カンファレンスで終わらず、最後に総評があるので、自分に至らない点や修正すべき点を改めて確認できてよかったです」「実習中に実践的な学びを得ることができた」「IBから介護過程の展開を行ってきたが、IB、IIA、IIBと段々アセスメントの仕方や記入の仕方、考慮すべきこと等をまとめる力や

考える力が身に付いたと感じた」と、ポジティブな内容が目立った反面、「先生により熱意が感じられたり、授業が丁寧だったが、一部の先生がダメだった」との指摘（1件）があつた。そこで、本授業を担当する教員が熱意をもって丁寧に指導できるように、今まで以上に授業の展開方法などについて情報共有した。

II. 今年度(2024年度)の授業評価に係る自己評価と今後の改善・工夫

1) 認知症の理解Ⅱ

今年度（2024年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点「4.67」であり、昨年度より0.03ポイント上昇した。また、学生のコメントとして、「とてもわかりやすかったです」「プリントや資料が見て見やすかったです」「専門の科目しっかり学べた」「レジュメに加え、資料があり、授業が分かりやすかったです」など、10件がポジティブな内容であった。一方で、「話し合いができる機会がほしい」を改善点として指摘するコメント（1件）があった。そこで、更に満足度を高められるように、グループ討議などを導入して授業を展開したい。

2) 介護過程Ⅰ

今年度（2024年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点「4.78」であり、前年度より2.4ポイント上昇した。また、学生のコメントとして、「授業がおもしろい」「説明を細かくしてくれていて分かりやすかった」「楽しかった」「色々な事例があり、分かりやすい」など、ポジティブな内容が目立った。引き続き満足度を維持できるように、授業の展開方法や資料作成などに注力したい。

3) 介護福祉論Ⅱ

今年度（2024年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点「4.54」であり、昨年度よりも2.6ポイント低下した。学生のコメントとして、「レジュメが見やすい」とポジティブな内容であった。前年度よりも2.6ポイント低下した要因として、「学生が主体的に学びに取り組めるように工夫していた」の項目の評価（平均点）が4.31と低い値であったことが考えられる。そのため、学生に介護福祉を取り巻く課題などについて調べたり、グループで検討して意見をまとめる等の機会を設けていきたい。

4) 発展介護過程

今年度（2024年度）の授業評価では、「Ⅱ 授業について」の平均点は「4.50」であり、昨年度より0.15ポイント上昇した。学生のコメントとして、「ケアカンファレンスを体験できた」「ケアカンファレンスをして、学びを深めた」「説明が分かりやすかった」「資料が充実していて分かりやすかった」など、全てがポジティブな内容であった。引き続き、学生の満足度を高められるように、他の教員と連携しながら丁寧な授業を心掛けたい。

学科:社会福祉学科・介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ・Ⅳ(演習)、介護レクリエーションⅠ(演習)、
介護実習指導Ⅱ(演習)、子ども家庭支援論(講義)、保育内容の理解と方法Ⅱ(造形)

授業評価アンケートの集計結果・自由記述に対するコメント

担当科目的評価平均点は、5点満点に対して4.33～4.72に分布し、7科目中5科目で学科平均点を上回った。令和4～6年度の評価の推移をみると、選択科目の「家族福祉論」4.63→4.54→4.52、「介護レクリエーションⅠ」4.63→4.48→4.33で低下傾向が見られるが、必修科目については、令和4年に評価が最も低かった「生活支援技術Ⅳ」では4.27→4.49→4.61と、連続して評価が上昇した。同じく必修科目的「生活支援技術Ⅰ」4.6→4.46→4.49、「介護実習指導Ⅱ」4.75→4.45→4.62、「子ども家庭支援論」4.34→4.32→4.40では、令和5年度に低下を示したが令和6年度には回復傾向に転じた。

これらの科目では、コロナ感染拡大期に対面授業が制約されて授業効果を上げにくかったが、令和4年度以降、グループワークやロールプレイを解禁したことにより、いったん授業満足度が回復した経緯をもつ。しかし、令和5年～6年度入学生においては、コロナ下で高校生活を送りオンライン形式や非接触型の授業に慣れているためか、対面でのアクティブ・ラーニングへの消極的姿勢や苦手意識を示す学生が目立ち、自由記述では、グループワークやロールプレイなどのアクティブ・ラーニングへの支持がこれまでに比べて低調だった。

グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、学びの意欲喚起や、授業への関心・集中力の向上においてこれまでに多くの効果をあげてきた。また、「生活支援技術Ⅳ」においては、手縫い作業を見せながら説明したり、学生の縫う様子を間近で見ながら個別指導をする必要上、動画などを活用するとしてもフェイストゥーフェイスの指導が最も伝えやすく、学生の理解度も向上する。コロナ禍でいつとき後退したアクティブ・ラーニングをよりアップデートするとともに、対話や意欲を引き出す工夫について模索を続け、学生が積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたいと考える。

なお、介護福祉専攻の学びの集大成である「介護実践研究」が令和4年度から始まったことにより、学生の負担が増して、令和4-5年度には、「時間が限られている中での研究で難しい」「実習中に研究も介護過程も進行するのがつらかった」など、過密なスケジュールに苦しむ様子が自由記述に語られていた。その一方で取り組みへの評価は概して高く、「自分の興味のあることについて研究して、実践や研究発表を通して今後の課題などを抽出できたので、最後まで頑張りきって良かった」「今まで文献や論文をしっかり見る機会がなかったが、研究によって読むことになり、自分の中で考えが深まった」などの回答も見られ、介護実践研究の取り組みが大きな成長をもたらしていることもうかがわれた。これらを踏まえて、令和6年度は「介護実践研究」をゴールとする介護総合演習としての授業展開を意識的に構成し、初回授業から介護実践研究に向けたスケジュールを呈示し、意識づけを図った。また、高齢者福祉の現場職員たちがどのように研究に取り組んでいるかを知るために、夏季休業期間中に開催される「高齢者福祉研究大会」(静岡県老人福祉施設協議

会)への参加を授業の一環として導入した。残念ながら、自由記述回答からはこの体験についてのコメントは得られなかつたが、令和6年度には介護実践研究についてのマイナスのコメントがいっさい無く、「介護実践研究に計画的に取り組むことができた」とのコメントが見受けられることから、「介護実践研究の完成をゴールに実習に取り組む」という意識づけが定着したように思われる。

以上を総括して、今後も引き続き丁寧な個別指導を通して学生の研究関心を引き出し、サポートと自主自立のバランスを考えながら学習を支援していく必要があると考える。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：准教授 氏名：尾崎剛志

対象科目：障害者の生活の理解Ⅱ（講義）、障害とコミュニケーション技法（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）、障害者福祉論（講義）

授業評価は平均を下回る科目が多い結果となっていますので、もう少し分かりやすさに対する工夫が求められるのかと考えます。

ワークシートが欲しいという意見もいただいているので、今後検討していきたいと思います。またパワーポイントが見にくいという意見については、少しずつ改善をしています。1枚のスライドの文字を減らしたり、スライドを分割したりするなど、改善中になります。グループワークが良かったという感想もいただいているが、グループワークをするためにもある程度の知識が必要だと考えているので、どうしても実施できる科目が限定されているのが現状です。グループワークとまではいかなくても、少し考えて話し合う時間をとれるようにしていきたいと思います。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:木林身江子

対象科目:身体のしくみI(講義)、介護過程IV(講義)、医療的ケアI(講義)、
医療的ケアII(講義・演習)、医療的ケアIII(講義・演習)

「身体のしくみI」は、テキストを中心に必要に応じて別途資料を配布し、小テストを含めながら授業を実施した。学生自身の授業の臨み方に関しては、「必要に応じて質問」「予習復習」の項目がやや低い点数であったことから、この行動につながるような対策(質問票の配布や課題の質・量の配慮等)を講じたい。また、昨年度と比較すると授業内容の理解という点でもやや低い評価であった。

自由記述にはパワーポイントや資料の内容が分かりやすかったとのコメントがあり、理解を高める要因になっていると考えられるが、さらに学生の理解度に応じて各講の量や範囲を調整し、配布資料についても改善していきたい。一方、演習を授業に含めた点や小テストを複数回実施した点は肯定的に受けとめられていたことから、今後も継続し身体のしくみへの関心・理解の向上に努めたいと考える。

「介護過程IV」は、内部障害のある人に対し、医学的知識に基づいた適切な介護・生活支援計画を立案するという介護過程の展開能力を養うことを目指している。対面授業を基本とし、数回の遠隔授業では対面の授業内容を復習することで回答ができる課題を提示した。また、授業資料は穴埋め形式や図表・イラストを盛り込んだ視覚的にも分かりやすい資料となるよう改善に努めた。学生自身の評価は、「疑問点を必要に応じて質問した」「予習復習をして理解を深める努力をした」「よく理解できた」項目について例年より高く、また授業の質・量の適切性等においても例年以上に高い評価であったことから、学生の理解度に応じた授業運営ができたと考える。今後もさらに授業資料の改善に努めながら、介護過程の展開ができる能力を高めていきたいと考える。

「医療的ケアI」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や喀痰吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。

対面を基本とし数回の遠隔授業を組み合わせて実施した。対面授業では、医療的ケアの基本事項、感染予防策などの講義をはじめ、尊厳、倫理上の留意点など、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えさせるような機会も作ることができた。また、バイタルサイン測定や感染予防策については、演習も含めて具体的な手順や留意点の学習機会を提供することができ、授業についての全体的な評価は良好であった。

しかし、学生自身の評価は低めであったことから、シラバスの意識化、必要に応じて質問、予習復習の実施につながるよう教授方法の工夫に努めていきたい。

「医療的ケアII・III」は、対面での講義・演習に加え、遠隔授業ではテキストの各章にある設問や国家試験を意識した問題を課題として提示した。評価は、学生自身について、授業について共に高い評価であり、授業の内容、質・量、進度についても概ね適切であったと評

価できた。また、学生の課題レポートの内容からも、概ね適切な理解がされたと評価することができた。

技術演習については、学生数が少ないと細かい部分の指導や不確かな知識・技術の修正等ができる、技術を苦手とする学生への指導も丁寧に行うことができた。また、教員による指導内容の相違が生じないよう教員間のコミュニケーションを取りながら指導を行うよう努めた。

自由記述からも学生の高い満足度を読み取ることができ、また、全員が技術試験に向けて意欲的に取り組むことができていたことから、本科目の目的は達成することができたと考える。

学科・専攻:社会福祉学科・介護福祉専攻 職名:講師 氏名:安瓊伊

対象科目:基礎介護技術(演習)、応用介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、発展介護過程(演習)、介護福祉演習(演習)、介護実習指導Ⅱ(演習)、介護実習指導Ⅰ(演習)

1. 授業の工夫

介護福祉専攻1年次の授業である「基礎介護技術」と「応用介護技術」では、支援の対象者である要介護状態の人の様々な介護場面や身体の動きのメカニズムなどに対する学生の理解が浅いため、学生の理解と技術習得程度を確認しながら学生が質問しやすい雰囲気をつくるなど丁寧に指導するよう心がけた。

「発展介護技術」では、事例を用いて1年次で学んだ介護技術を利用者個々人の状態に合わせて応用する技術研究に取り組んでいる。少人数でのグループワークの時間が多いため、担当学生が自主的に役割分担を決め、積極的にグループワークに取り組めるよう、学生個々の取り組みを支援するよう努めた。

「発展介護過程」では、オムニバス形式の授業であり、2年次の実習後の個別指導を行っている。実習での担当利用者に対するアセスメントや個別介護計画など介護過程の展開について丁寧に確認し指導するよう心がけた。

「介護福祉演習」では、介護福祉士国家試験対策に取り組んでいる。オムニバス形式で科目ごとに過去問や予想問題を解いてもらい、誤答率の高い問題を中心に解説をして理解を高めるよう、苦手科目はより時間をかけて実力をアップしていくよう努めた。

「介護実習指導Ⅱ」では、2年次の介護実習や介護実践研究に計画的に取り組み、その集大成である介護実践研究報告書を作成し、介護実践研究発表会で学生全員が発表できるよう全体指導で実習全体の流れの説明をし、学生各自の取り組みについては個別指導を行った。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「基礎介護技術」の評価は学科平均点を下回り、「応用介護技術」の評価は学科平均点を上回った。「基礎介護技術」において、「(11)毎回の授業の量と範囲が適切であった」「(15)教員から与えられた課題は、量・質とともに適切であった」「(18)成績評価の方法は適切であった」の項目の評価が4.38と他の項目より低かった。学生から『介護をする上での基礎がしっかりと学べた』『実際に道具を使ったり実技をしたりすることでより深く学ぶことができた』『一つ一つ丁寧に教えてください、どれも分かりやすかった』等の意見があった。今後も学生の理解と技術習得程度を確認しながら、様々な介護用具を取り入れ、丁寧に指導していきたいと考える。

「発展介護技術」の評価は、全体的に学科平均点をかなり上回り、学生からは『実際の事例をもとに技術の応用を活かすことができた』『グループメンバーと協力して、事例の介護技術研究、発表を行うことができた』等の意見があった。担当学生が自主的に協力してグループワークに取り組めるよう指導していきたいと考える。

「介護福祉演習」の評価は、全体的に学科平均点を上回り、学生からは授業全体の意見と

して、『様々な問題を解いて苦手分野を克服することができた』『分かりやすい解説が大変勉強になった』等の意見があった。今後も出題傾向や学生の理解度を分析し、適切な問題をとりあげ解説するなど工夫していきたいと考える。

「介護実習指導Ⅱ」の評価は、全体的に学科平均点を上回り、学生から『介護実践研究に計画的に取り組むことができた』『先輩方のお話が大変勉強になった』等の意見があった。学生が計画的に実習や実践研究に取り組めるよう、細かな個別指導をしていきたいと考える。

学科・専攻:社会福祉学科 職名:講師 氏名:濱口晋

対象科目:コミュニケーション I (講義)、コミュニケーション II (講義)、介護過程 II (演習)

介護実習指導 I (演習)、介護福祉演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーション I II」の授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーション I」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーション II」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。この2科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用と位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、DVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習も行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

【コミュニケーション I】 【II 授業について 平均点 昨年度 4.20→今年度 4.30 範囲 4.07～4.43】

「(10)授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」は、過去において類似した質問項目は 4.00 未満だったこともあり、一昨年度 4.42 と改善していたが、昨年度は 4.20、今年度も 4.29 と評価が若干低下したままである。「(12)教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(13)教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」・、一昨年度 4.47 から今年度 4.19、今年度 4.29 と評価が若干低い。特に「(14)教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」の項目においては、一昨年度 4.47 から昨年度 4.19、今年度 4.07 と評価が若干低下した。過去には、『説明が長すぎる、わかりづらかった』や『パワーポイントのスライドが速い』や『話す口調やタイミング、顔の表情によってはわかりにくい』等の意見もあり、今年度は、授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものではなかったと受け止めている。今後はわかりやすく話すよう心掛けたい。

一方で、『グループワークが多く、意見交換がたくさんできて良かった』との意見も複数あったため、学習者の理解度や学習態度に応じて、「講義」「演習」を取り入れた双方向の授業が展開できるよう、修正・改善していきたい。

「コミュニケーションⅡ」【II 授業について 平均点 昨年度 4.74→今年度 4.47 範囲 4.38～4.54】

「コミュニケーションⅡ」については、昨年度、『スライドが見やすい』『スライドと映像資料で理解が深まった』等の意見があり、評価が高かったが、今年度 0.27 ポイント低下した。今年度も「映像資料を併せて見ることで理解が深まった」との意見もある一方で、『授業開始時間と終了時間の徹底してほしい』の意見もあり、授業の時間配分等も含め、適切でないので、より一層気をつけていきたい。また、授業資料と対面(口頭)で「休講」と指示していた講義回において、ユニバーサルパスポート上では「休講」となっておらず、学生に対してご迷惑かけてしまった。休講等変更した場合、ユニバーサルパスポート上でも再確認していきたい。今後も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、シラバスに沿いつつも、授業内容も柔軟に修正できるように改善していきたい。

「介護過程Ⅱ」【II 授業について 平均点 昨年度 4.64→今年度 4.62 範囲 4.50～4.71】

「介護過程Ⅱ」についても、昨年度に比べ改善し、今年度も維持した。複数教員のオムニバス形式の授業であり、昨年度各教員が内容について見直しをした結果、介護過程をふまえ、様々な介護サービスを知ることができた等学びが深まっていると思われる。

「介護実習指導Ⅰ」【II 授業について、平均点 昨年度 4.73→今年度 4.61 範囲 4.50～4.71】

「介護実習指導Ⅰ」については、改善した昨年度と比べ、若干評価が低かった。各項目それぞれは、大きく低下していないが、例年、自由記述欄にあった『実習の心構えを学ぶことができた』『学びが深かった』等の意見がなく、今年度は無回答であった。そのため、授業毎に学生の声を拾い上げる等の学生の声を聴く工夫して、授業改善に取り組みたい。

「介護福祉演習」【II 授業について、平均点 昨年度 4.70→今年度 4.71 範囲 4.69～4.75】

「介護福祉演習」については、「(13)教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」は昨年度 4.39 に低下していたが、今年度 4.75 と大きく改善した。『苦手分野克服できた』、『わかりやすい解説が良かった』、その結果、学力評価試験においては好成績を収め、6年連続介護福祉士国家試験合格率 100%も達成した。また、養成施設別合格率も合格者数で5年連続の全国上位の結果を収めることができている。今後も教室以外に演習室を『自習室』として開放する等個人やグループで学習しやすい環境を整え、一人ひとりの習熟度に応じた学習支援を行っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:助教 氏名:大石桂子

対象科目:介護過程Ⅱ(講義)、認知症の理解Ⅰ(講義)、基礎介護技術(演習)、応用介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導Ⅰ(演習)、介護実習指導Ⅱ(演習)

・基礎介護技術、応用介護技術

学生からは、わかりやすかった、色々な介助のやり方を知れた、介護をする上での基礎がしっかりと学べたなど、良かったと思うことへのコメントが多くあった。授業に対する意見の中に、たくさんあって忘れそうという言葉もあり、特に基礎介護技術は進度が早いため、復習の機会を設けるなどして、学生の技術が身に着くように工夫していきたい。

・発展介護技術

グループワークの時間が多いため、担当学生の自主性を高められるように関わった。アンケートではすべての項目において高い評価であったことや、学生のコメントから、本授業への関心は高く、深い学びが出来たと考える。

・認知症の理解Ⅰ

認知症について深く知ることができたいという意見が多くあったことから、基礎的な学びの習得が出来たと考える。また、実際の経験を話してくれて想像が広がった、具体例や実際の施設での話を聞けて良かったという意見もあり、教員の経験を踏まえた授業内容を理解してもらえたと考える。改善点として、スライドが早いという意見があったため、配布資料の工夫などを改善していきたい。

・介護過程Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。シラバスに目を通した、という項目の点数が低かったことから、授業開始時に学生にシラバスを確認する機会を設けたいと思う。担当する授業最終回に授業に対する感想を書いてもらったところ、理解が深まった、ディスカッションがあつてよかったです、毎回前回の復習から入っていたので良かったという意見をもらった。

・発展介護過程

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。個別指導、ケアカンファレンスにおいては、学生間での積極性に差が見られた。カンファレンスを実施する人数が少なく、議論が止まってしまうことも多くあったことが課題である。

・介護実習指導Ⅰ, 介護実習指導Ⅱ

オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。学外実習に関連する科目であることから、引き続き教員間で連携して取り組んでいきたい。

学科・専攻:こども学科 職名:教授 氏名:小林佐知子

対象科目:

＜前期＞「心のしくみ」(講義、介護福祉専攻1年)、「教育相談」(講義、こども学科2年)、「保育の心理学」(講義、こども学科・社会福祉専攻1年)、「子どもの理解と援助」(演習、こども学科・社会福祉専攻2年)、「子ども家庭支援の心理学」(講義、こども学科・社会福祉学専攻2年)

＜後期＞「発達と老化I」(講義、介護福祉専攻1年)、「教育心理学」(講義、こども学科2年)

1. 授業についての自己評価

評価を受けた科目はすべて対面授業であった。

前期の「心のしくみ」「教育相談」「保育の心理学」「子どもの理解と援助」「子ども家庭支援の心理学」は、アンケートの『あなた自身について』(授業への意欲や態度など)、『授業について』(教員の授業方法や対応の適切さ)のどちらも学科・専攻平均点と同じか少し上回っていたため、比較的良い評価であったといえる。後期の「発達と老化I」も同様の結果であったが、「教育心理学」のみ、『あなた自身について』が少し学科・専攻平均を下回っていた。“自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した”“自分は、予習復習をして理解を深める努力をした”の項目が低く、授業に消極的な傾向がうかがわれた。自由記述では、全体的に“楽しい授業”“おもしろい”“わかりやすい”“心理テスト”“グループワーク”というワードが散見された。「子どもの理解と援助」で子育て支援センターの保育者の実技指導を入れたことにより、保育実践について考える機会も増えた様子であった。

2. 今後の改善・工夫

2年生の後期になると、学びの積極性が下がる傾向があると毎年感じている。その意味で、「教育心理学」で実践にむすびついた課題を設定するなど、引き続き工夫をしていきたい。

3. 学生への要望等

私語がない、グループワークに積極的に参加する、コメントカードはしっかりと記入するなど、授業態度がよいので授業がしやすい。たまにこっそりスマホを見ている人がいるが、個人的にとても気になるのでやめてほしい。

学科・専攻:こども学科 職名:教授 氏名:藤田雅也

対象科目:保育内容の理解と方法 I (造形) (演習)、保育内容の理解と方法 II (造形) (演習)、
保育内容指導法(表現) (演習)、子どもの表現 B (演習)

I . 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○保育内容の理解と方法 I (造形)

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

○保育内容の理解と方法 II (造形)

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○保育内容指導法(表現)

保育の内容としての 5 領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○子どもの表現B

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

II . 授業についての自己評価

○保育内容の理解と方法 I (造形)

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「II 授業について」の項目については、当科目平均点が 4.86 と高い数値結果であった。中でも、「教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた」(4.93)、「安全についての指導や配慮が十分なされていた」(4.91)などが高い結果であった。

授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にした。自由記述には、「毎時間楽しむことができた。子どもの頃の楽しさを感じることができて良かった」、「『こんな作り方もあるんだ』と、新たな発見があった」などが挙げられた。

○保育内容の理解と方法 II (造形)

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「II 授業について」の項目については、当科目平均点が 4.86 と高い数値結果であった。中でも、「教員は、学生に対して誠実に対応していた」(4.91)、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」(4.91)などが高い結果であった。

授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「様々な造形活動を経験出来て楽しかった」、「子どもの気持ちになって造形を楽しむことができた」などがあった。

○保育内容指導法(表現)

「II 授業について」の項目については当科目平均点が 4.77 であり、学科・専攻平均点の 4.78 と同様の結果であった。中でも、「教員に授業に対する熱意が感じられた」(4.80)、「毎回の授業の量と範囲は適切であった」(4.80)などが高い結果であった。

授業では、5 領域を総合的に学ぶオリジナルシアターの制作と発表や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「実践として部分実習ができたので、実習のいい練習になった」、「『頭足人』など、知っておくべき知識をわかりやすく理解できた」などが挙げられた。

○子どもの表現 B

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「II 授業について」の項目については当科目平均点が 4.91 と高い数値結果であった。中でも、「教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」、「教員は、学生の理解度が深まるように授業方法を工夫していた」、「教員に授業に対する熱意が感じられた」、「教員は、学生に対して誠実に対応していた」、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」の 5 つの設問に対しては、いずれも 4.97 という高い数値結果であった。

授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。自由記述には、「様々な表現を学ぶことができて、自分なりに試行錯誤したり、仲間とのコミュニケーションなども深めたりすることができた」、「つくることってたのしい！と思える時間がたくさんで、とても学びが多く、充実した時間だった」などが挙げられた。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:及川直樹

対象科目:保育内容の理解と方法 I (身体) (演習)

「I あなた自身について」と「II 授業について」の平均点は、いずれも 4 点以上であったが、I は学科・専攻の平均点をわずかに下回る結果となった。

特に、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の平均点が 3.29 点、「自分は予習復習をして理解を深める努力をした」が 2.69 点と、他の項目と比べて著しく低かった。これらの項目の評価を改善するために、授業終了直前に質疑の時間を設けたり、毎回の授業で配布するプリントを回収し、それを次回の授業開始時に返却し、振り返りに使用したりすることを検討したい。なお、自由記述において、体育館内の環境や用具等の配置などに関する要望が寄せられた。これらの点について、対応が可能なものについては次年度以降対応していきたい。

対象科目:子どもの健康(演習)

「I あなた自身について」と「II 授業について」の平均点は、いずれも 4 点以上であったが、学科・専攻の平均点をわずかに下回る結果となった。特に、I の「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の平均点が 3.66 点と、全ての項目を通じて最も低かった。これらの項目の評価を改善するために、適宜学生の理解度を把握しつつ、授業中および授業終了前に学生からの質問を受け付ける機会を設けるようにしていきたい。

対象科目:保育実習指導 I (演習)

「I あなた自身について」と「II 授業について」の平均点は、いずれも 4 点以上であり、かつ学科・専攻の平均点を上回る結果となった。特に、I の「自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた」や「自分は、この授業を意欲的な態度で受講した」の平均点が 4.9 点を超えており、学生が毎回の授業に意欲的に臨んだことがうかがえた。こうした結果を他の担当教員とも共有しつつ、授業を通じて実習に対する高い意識や意欲を醸成することができるよう、次年度以降の授業スケジュールや内容をよりよいものにしていきたい。

対象科目:保育内容指導法(健康) (演習)

「I あなた自身について」と「II 授業について」の平均点は、いずれも 4.5 点以上であり、学科の平均点とほぼ変わらない水準であった。ただし、I では、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の平均点が 4.40 点と、全ての項目を通じて最も低かった。そのため、毎回の授業の進度に応じて、また授業終了直前に疑問点があるかどうかを確認する時間を設けたい。なお、自由記述では、今年度より導入した模擬保育に対する肯定的な意見が複数寄せられた。

学生の負担に配慮し、授業前半にグループごとに模擬保育を実施したことや、実施した内容に対して、教員や学生から多くのアドバイスをもらえたことがプラスに働いたようである。

次年度以降も模擬保育を実施する予定であるため、指摘された点を維持しながら、より実践的な模擬保育を展開できるようにしていきたい。

対象科目:保育内容の理解と方法Ⅱ(身体)(演習)

「I あなた自身について」と「II 授業について」の平均点は、いずれも 4.9 点以上であり、かつ学科・専攻の平均点を上回る結果となった。I と II の計 26 項目のうち、24 項目は平均点が 5.0 点であった。本授業は選択科目であるため、毎年受講者は少ないものの、意欲のある学生が受講する傾向にあるとともに、ゼミ指導のような距離感で教員と学生、あるいは学生同士がコミュニケーションを取りながら授業を進めることができる。また、自由記述にも示された通り、保育現場で活用できる実践的な内容を授業で取り扱っている。こうした点が高い評価につながったと思われる。次年度以降も継続して高い評価が得られるよう、授業内容や方法の改善に努めていきたい。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:松浦崇

対象科目 : 社会的養護Ⅰ（講義）、社会的養護Ⅱ（演習）、子ども家庭福祉（講義）、
子育て支援（こども学科）（演習）、子育て支援（社会福祉専攻）（演習）
教育の方法と技術（講義：オムニバス）、人間関係と援助技術（講義：オムニバス）

I 授業の目標・工夫など

「社会的養護Ⅰ」・「Ⅱ」は、保育士資格取得を希望する1年生対象の科目ですが、本授業で学ぶ社会的養護（各種施設や里親制度）は、多くの人にとって、これまでの生活で触れる機会が少なく、特に1年生にとっては具体的なイメージを掴みにくいものとなっています。また、保育士＝保育所や幼稚園のイメージが強い人にとって、施設は関心を持ちにくい部分もあると思われます。そこで、授業では、なぜ社会的養護を学ぶことが必要なのかを伝えることを大切にし、問題を他人事としてではなく身近なものとして捉えることができるよう、映像資料をはじめ、新聞記事、当事者による漫画・手記などの資料を活用し、当事者の言葉・思いに触れる 것을重視しました。

「子ども家庭福祉」・「子育て支援」においては、近年の社会動向をふまえながら、各種制度・施策の概要や、支援が求められる社会的背景について理解を深めることができます。特に、「子ども家庭福祉」では、ゲストスピーカーをお呼びし、障害者支援の実際の様子や、障害者を育てる保護者の思いなどについて、直接学ぶ機会を設けました。

全学共通科目である「人間関係と援助技術」については、受講生が複数の学科・専攻・学年に及ぶことから、対人援助職として共通して課題となる具体的な事例を多く取り上げることで、授業内容の充実に努めるとともに、専門職間の協働、多職種連携のあり方を学ぶ機会となるよう心掛けました。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

全体として、授業について、当科目平均点で4.6～4.8となり、高い評価を得ることができたと考えています。

自由記述では、「映像やレジュメがニーズに合ったもので、分かりやすい内容だった」、「映像をつかつていて事例が分かりやすかった」など、授業方法について評価する声が多くありました。今後も、レジュメや映像資料を適切に活用しながら、丁寧な授業に努めていきたいと思います。また、「援助に対しての大切なことを学べた」、「施設等への興味が増した」など、授業を通して、福祉や援助について理解・関心が高まったという声もあり、授業で目的としていたことは一定程度達成できたものと考えています。

また、ゲストスピーカーについては、参考になったという積極的な評価が多くあったため、今後、他の授業でも取り組んでいきたいと思います。

他方、「教員に質問した」、「予習復習をして理解を深める努力をした」など、「あなた（学生）自身の取り組みについて」の項目については、やや低めの評価となりました。中でも、全学共通科目である「人間関係と援助技術」では、平均より低い評価となっていました。さまざまな学科・学年の人人が同時に学ぶ、全学共通科目という位置づけの難しさもあるのですが、幅広い人に意欲的に授業に臨んでもらえるよう、改善を図っていきたいと思います。

学科・専攻:こども学科 職名:講師 氏名:甲賀崇史
対象科目:子どもの環境(講義)

「II. 授業について」の当科目平均点は4.78で、学科・先行平均点と同値であった。

項目ごとにみると、特に低い項目は「授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった(4.71)」と「授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた(4.71)」であった。授業の難易度が、やや高いように思われたので、次年度の授業では、内容を精選し、ひとつひとつの事項に時間をかけて丁寧に伝える改善を行う。また、シラバスに沿った授業の計画と内容について、今年度の授業は、初回の授業でシラバスを示しただけで、その後、参照することがなかった。次年度は、授業が始まるときに、シラバスを示すことで、学生がいまシラバスのどこを学んでいるのか確認できるように改善する。次に自由記述について、「この授業で改善が必要だと思うこと」欄では、「対応が雑」、「回答欄小さすぎ」といった指摘があった。今後は学生の要望に丁寧に対応するように努力する。また、次年度の試験は解答欄を大きくするかたちで対応する。

今後の工夫について「授業で良かったと思うこと」では、「きめ細かに教えてくれた」、「ビデオから指導案を書いたりする実践的な授業なこと」などのコメントがあった。次年度以降の授業では、なるべく一人一人の学生にきめ細かに指導をするように心がける。また、子どもの姿から指導案を立案する授業は、次年度も継続して実施する。

学生に期待すること、学生への要望等については、特にない。どの学生も、大変前向きな態度で臨んでおり、授業はとても行きやすかった。授業アンケードのコメントにはなかつたが、「子どもと環境」は教職課程の「領域に関する専門的事項」であり、各領域の「学問的基盤や背景」を学ぶため、指導法に比べると、何の役に立つか、実践とのつながりがみえにくい授業だと思う。次年度は、より保育実践とのつながりを意識して、授業を組み立てるように努力したい。

学科・専攻:こども学科 職名:講師 氏名:山本学

対象科目:保育内容の理解と方法 I、II(音楽)(演習)、子どもの表現 A(講義)、音楽通論(講義)、保育内容指導法(表現)

[保育内容の理解と方法 I、II(音楽)(山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鶩巣貴乃、小林摩湖)]

Iではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、IIでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、和太鼓、音楽療法、リトミックのいずれかを学習する。授業は伴奏法カードを採用し、独自の工夫を行っている。

評価は概ね平均を上回っていた。16教員の熱意、17学生対応、18評価の公平性などは特に高評価であった。自由記述において、「ピアノがとても楽しかった」などの楽しい評価が見られる一方で、一部「ピアノの試験が緊張するのでどうにかしてほしい」との要望があったため、次年度より一度の失敗で評価が確定してしまわないような評価方法を導入することを考えている。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。例えば、サン=サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるような工夫を行っている。そのほかにピアノ連弾の実践、映像と音楽鑑賞など、動きのある授業づくりをしている。

評価はI、II、III全ての項目で平均を上回っていた。自由記述においては、「ふだん触れることのない音楽をきいたり、知ったりできた」、「難しい内容を映像を通してわかりやすく学べた」など教養科目としての役割を果たせているのではないかと思えるものがあった。

[子どもの表現 A]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。クレ読みを取り入れ、楽譜を速く読めるようにする演習や保育と音楽の論文を読む機会を作るなどの工夫をしている。評価は学科平均とほぼ同じであった。自由記述で「楽典の仕組みが難しい」というものがあったので改善ていきたい。

[保育内容指導法(表現)]

前期はオリジナルシアター、後期は模擬保育や手遊び歌の実践、昔遊びの音楽などを取り扱う。評価は概ね全て平均並みであった。自由記述で「手遊びを学べてよかったです」、「自分たちの思った事を自由に発言できるので楽しかった」などがあった。

学科・専攻:こども学科 職名:助教 氏名:崔美美

対象科目:保育原理(講義)、幼児理解(講義)、保育内容指導法(人間関係)(演習)

1. 授業の工夫(授業目標)

○ 保育原理

保育者になるために必要な保育の基礎や基本原則、子どもたちの育ちを支える「保育」という営みを探求していく「問い合わせ」の立て方などについて学んでいく。

○ 幼児理解

幼児理解の意義を理解し、幼児理解を深めるための保育者の基礎的な態度を理解する。保育における幼児の生活や遊びの実態に即して、幼児の発達や学び及びその過程で生じるつまずき、その要因を把握するための原理や対応の方法を考えることができるようとする。

○ 保育内容指導法(人間関係)

乳幼児の認識・思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解する。領域「人間関係」の特性や乳幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができるようとする。領域「人間関係」の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができるようとする。

上記の授業目標を達成するために、授業における保育現場での参与観察、保育現場の写真や動画、保育者からの経験話などを通して、保育の実際に触れることで、子どもや保育に対する理解を深めることができたと考える。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○ 保育原理

学生のコメントに「先生がレジュメを分かりやすくかつ、学びが深まるように作られた」「映像や実体験の際の写真が多くてイメージしやすかった」「先生の教え方が丁寧で分かりやすかった。グループワークもあり、楽しく授業を受けられた」などが記されていたことから、授業の実施にあたって、さまざまな教授法を活用することで学生の学びを促すことができたと考えられる。

○ 幼児理解

授業の実施にあたって、スライドの作成、写真や動画、エピソードを用いた実践事例の共有、幼稚園の保育参観などを行っており、実際の子どもの姿に触れることで、幼児理解が深まることができたと考えられる。

○ 保育内容指導法(人間関係)

保育内容指導法について、「人間関係」に焦点を当てて行うことで、「子どもの時からの人間関係の大切さに気づくことができた」。また、授業での学びを踏まえて、最後に小グループで模擬保育(部分実習)を行うことができるよう、実践する機会を設けることで、実習に向けた実践と方法を考えることができたと考えられる。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

授業における「学生の学習に取り組む態度や学びに向かう力」に大きな差が見られた。授業を受ける学生として、授業ごとの特徴について理解し、主体的・積極的に取り組むことが望ましい。また、学びの場において、仲間や教員等の相手を尊重する気持ちや態度を身につけることが求められる

学科：こども学科 職名：非常勤講師（名誉教授） 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）教育課程・保育計画論（講義）幼児教育者論（講義）
保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導（共同）教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

こども1年生前期科目「保育内容（総論）」「幼児教育者論（講義）」社福2年生前期科目「保育者論」は、グループワークや映像を使ったことで「理解しやすかった」という声が多かった。

「幼児教育者論」については、2年生と合同の授業だったので、1年生にとっては深い学びになつてことがわかつた。

こども学科1年後期科目「教育原理」については、「自分たちで調べて発表することでより理解を深めることができた」という意見があり、学生自ら調べることが深い学びに有効であったといえる。「テストの形式をしりたい」という声もあったが、全体を復習することが重要なので、ぜひ、どこがポイントなのかを考える力を付けて欲しいと願っている。

こども学科・社福1年後期科目「教育課程・保育計画論」については、本年度の学生にはよかつたという声が多く、「一つひとつの授業が考えられていてためになった」との声もあり、このやり方が有効であったと感じた。

こども学科・社福1年後期科目「保育内容指導法（言葉）」は、「言葉について新たな視点から学ぶことができた」「事例からつながる学びが多くて、より理解できた」という声があり、嬉しく感じている。

私の授業科目の評価が、ほぼ平均近くに集まっていることを考えると、本学の学生たちにはこのような授業の方法が合っていたのだと思う。様々な学生がいるので、学生に合った学習方法を考えていきたい。